

ほとりの木のかげにおりゐて、かたいひくひはり、そのさわにかきつばたいとおもしろく咲たり、それをみてある人のいばく、かきつばたといふ五もじを句のかみにすゑで、たびの心をよめといひければよめる。

から衣きつ、なれにしつましあればはるくきぬる旅をしぞおもふ、とよめりければ、みな人かたいびのうへに、涙おとしてほとびにけり。○又見古今和歌集

〔扶桑殘葉集 十七〕八橋のことば

賀茂眞淵

言のかたりぶみに、三河なる八橋のことをいへらく、水せく川の蜘蛛なれば、橋を八つわたせりと、そもく里回の川つらをせくば何ぞ、とほし廣くよつに水まかせんとなり、くもでは何ぞ、川の左によつ、右に四つの溝して、水まかせるものは蜘蛛が手のひだりみぎりもて、八つあるがさまぞとや、八橋とは何ぞ、川のひだりみぎりに、川をび路のありて、さとの子のかよへらんには、かのやつ溝に、八つのはしをわたせりとなり、凡田居には、よついつ、らのはしをあふさきるさにわたせる多かれどな、はしきやけり、かゝるわらべのもたるふみをし見れば、水ゆく川とあり、此古きには水堰川とし書つればいへるか、ことことわりあらはに、まことにさなりけるとおもほゆ、

〔後撰和歌集戀九〕つらかりける男に

讀人宏らす

たえはつる物とはみつゝさゝがにの糸を頼める心ぼそさよ

かへし

うちわたし長き心はやつ橋のくもでに思ふことはたえせし

〔奥義抄 中ノ中〕うちわたしながき心はやつはしのくもでに思ふことはたえせし

やつはしのくもでとよむ事は、はしにはくもでといひて、柱にちがへて打たるものゝあれば、